

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

音象徴を取り入れたオノマトペの

指導とその効果

— 中国人日本語学習者を一例として —

張 熙佳

2023年9月

本論文は 6 章で構成されており、概要は以下の通りである。

第 1 章 序論

本章では、本論文の研究背景・目的・構成について述べた。オノマトペは日本語教育にとって重要な要素であり、日本語母語話者はオノマトペを容易に理解することができる。しかし、日本語学習者にとってオノマトペは習得が難しい。一方、オノマトペと音象徴は密接に関わり合うはずのテーマであり（秋田 2013）、浜野（2014）は日本語のオノマトペが音象徴的機能を組織的に体系化した語彙システムであると述べている。しかしながら、音象徴がオノマトペの特徴の一つではあるものの、中国人日本語学習者は音象徴に関する知識をあまり持っていない。以上のようなことから、筆者はオノマトペの音象徴に関する知識を中国人日本語学習者に明示的に教えることが、オノマトペの理解と習得にどのような効果があるのかを明らかにしたいと考える。

そこで、本研究の目的は、音象徴に関する知識を明示的に伝えて中国人日本語学習者に指導することにより、実験群の学習者のオノマトペの理解にどのような影響があるのかを検証することである。また、実験群と統制群両群の学習者はオノマトペ授業によるビリーフの変化と学びを明らかにすることである。以上の観点から、本研究のリサーチクエスション（以下、RQ）を 4 点設定した。

実験群の学習者は、音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業により、

RQ1：オノマトペのイメージへの理解を促されたか。

RQ2：どのようにオノマトペのイメージを喚起したか。

RQ3：ビリーフにどのような変化がもたらされたか。

RQ4：どのような学びを得たか。

第 2 章 先行研究

第 2 章では、オノマトペの定義と音象徴に関する理論を概観した。それから、日本語教育におけるオノマトペの先行研究をまとめた。さらに、語の知識と語彙テストについて概観した。最後に、先行研究に基づき本研究の位置づけについて述べた。

第 3 章 研究方法

本章では、本研究の実験授業、調査協力者、行った 4 つの調査、分析の方法、研究倫理

について述べた。実験授業について、筆者は中国にいる中国人中上級日本語学習者 53 名を募集し、実験協力者として、実験群（音象徴の知識を教える群）と統制群（教えない群）に分けた。一方には毎回 60 分の授業を通じ、音象徴の知識を言及しながら、オノマトペを教えた。もう一方は音象徴の知識を言及することなく、毎回 60 分の授業を通じ、オノマトペを教えた。両群に事前・事後・遅延テストを行い、半構造化インタビューを実施した。分析の方法としては、帰納的テーマティック・アナリシス法を採用した。

第 4 章 調査の結果と考察

本章では、第 3 章で述べた 4 つの調査の結果とそれに対する考察について記述した。具体的には、調査①：事前テスト、事後テスト、遅延テスト、調査②：オノマトペのビリーフのアンケート調査、調査③：未習のオノマトペのイメージを喚起課題及び調査④ 実験授業における学びについての半構造化インタビューの結果と考察を述べた。

第 5 章 考察

本章では、第 4 章を踏まえて考察し、本研究の RQ に対する答えた。また、オノマトペの指導への提言を述べた。本研究の RQ の答えは以下である。

RQ1：実験群の学習者は、音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業により、オノマトペのイメージへの理解を促されたか。

RQ1 への答えは部分的に肯定的である。音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業は、実験群の学習者のオノマトペのイメージへの理解を一定程度促進することができた。しかし、その効果が統制群の学習者に比べて顕著であったとは言えない。したがって、授業は一部の学習者に対しては有益であったかもしれないが、全体としては必ずしも有意な影響をもたらすものではなかったと結論付けることができる。

RQ2：実験群の学習者は、音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業により、どのようにオノマトペのイメージを喚起したか。

音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業は、学習者が様々な方法でオノマトペのイメージを喚起するのを支援するものであったと結論付けられる。これは音象徴の対比、既習の

オノマトペや語彙の活用、母語の知識の利用といった、学習者自身の独自のストラテジーを形成する助けとなっている。

RQ3：実験群の学習者は、音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業により、ビリーフにどのような変化がもたらされたか。

音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業が学習者のビリーフに一部肯定的な影響を与えていることである。具体的には、オノマトペの意味を音象徴から推測する能力が向上し、オノマトペの中国語訳の理解が容易になり、日常的なオノマトペの使用頻度が増加するという変化が確認された。この結果は、音象徴の知識を取り入れた授業が学習者の自己評価とビリーフに一定の効果をもたらしたことを示している。

RQ4：実験群の学習者は、音象徴の知識を取り入れたオノマトペの授業により、どのような学びを得たか。

本実験授業は学習者の日本語能力を高め、言語理解の深化に寄与すると考えられる。それは学習者自身の感じ方や理解を深化させ、そして自身の学習を振り返り、発展させる機会を提供する。

本研究から得られた教授法の提言は以下の4点である。まず、音象徴の導入が重要であることが示唆される。次に、学習者の母語を有効に活用することが推奨される。また、既習のオノマトペと語彙を統合して教えることが有益であるとされる。最後に、学習者間の相互作用を促進する手法が重視される。

第6章 本研究のまとめ

本章では、本研究の意義と今後の課題を示した。

本研究の意義は以下の2点である。1つ目に、オノマトペのイメージを音象徴から推測する能力の向上に関連していることを明らかにした。2つ目に、日常的なオノマトペの使用頻度の増加の結果である。

本研究の課題を4つ挙げた。まず1点目は、対面授業における音象徴の取り入れの効果を評価することである。2点目は、多様な学習者を対象に、効果を検証することが必要で

ある。3点目は、子音/z/、/n/、/h/、/m/の音象徴の喚起の方法の研究が求められる。最後に、音象徴の理解と利用をより容易にするような方法の開発が期待されている。

【参考文献】

秋田喜美（2013）「オノマトペ・音象徴の研究史」篠原和子・宇野良子（編）『オノマトペ 研究の射程—近づく音と意味』第19章,ひつじ書房,pp.333-364.

浜野祥子（2014）「日本語のオノマトペ—音象徴と構造」くろしお出版